

森泰吉郎記念研究振興基金(研究者育成費)
報告書

研究課題名: キャリア教育における行動意欲とキャリア観の醸成
政策・メディア研究科 修士2年 正村あづさ

2015年2月23日(月)

2015年2月23日(月)

このたびは、森泰吉郎記念研究振興基金の研究助成を賜わりありがとうございます。以下にご報告申し上げます。

研究課題名 キャリア教育における行動意欲とキャリア観の醸成
研究代表者氏名 正村 あづさ (しょうむら あづさ) **所属・学年** 政策・メディア研究科 修士課程 1年
連絡先(Tel) 090-1426-4893(研究代表者携帯) e-mail shomura@sfc.keio.ac.jp
指導教員名: 花田光世 先生 (主査: 飯盛義徳 先生)

研究概要

* 申請書より抜粋

本務校(成城大学)での担当科目「キャリアモデル・ケーススタディ」(全学部共通正課科目 2単位)では、①社会人ゲストを招きキャリアの転機をうかがい、②グループ課題として著名人の人生を分析し、③個人課題として身近なモデル(家族やバイト先店長等の一般社会人)にインタビューをする。人生の予期せぬ修羅場・正念場を乗り越えた人生のストーリー「他人史」を冊子化し、授業終盤にモデルに贈呈する。

この授業のプロセスを通して、「一人ひとり誰にもドラマがあり、経験と成長を繰り返しキャリアは形成される」ことを学ぶ。

この授業の基になる『ダイナミックプロセス型キャリア論』(花田光世,2013)と上記①②③の活動を通しての学生個々の「キャリア観」(主体的創造的生活態度・自律的取組姿勢と将来展望等)の向上を考察する。

さらに、研究の次のステップとしては、学生が卒業後、予測不能・理不尽な社会を前向きに捉え、どのように仕事と社会に貢献するか、この概念が発揮した影響についても考察したい

* 成城大学はじめ授業は旧姓、勝又あずさで行なっています。

1.研究の背景

本務校(成城大学)での担当科目において、「予期せぬ出来事を肯定的に捉え、自らの可能性を上げていく」といったアプローチの自分の授業が、キャリア教育にどのような効果があるかを考察する。

正課科目「キャリアモデル・ケーススタディ」では、正解も必勝法もないキャリアの在りかたを、不条理、理不尽、予測不能な社会で生きる諸先輩のケースから考える。「ダイナミックプロセス型キャリア理論」を学び、変化を前向きに捉えるキャリア観の醸成について、調査し考察する。

「ダイナミックプロセス型キャリア理論」とは、自らチャンスや可能性を拡大し、多様な人たちとの出会いを通して学びが生まれ、新たなライフスタイルの構築を目指すプロセス。ビジョンを持ち行動し、予期せぬ動きや変化が出てきた時、逃げずに自分の成長のきっかけに活用する。また、集団においては、相互に啓発し成長する中で、個の相互プロセスがダイナミックな全体の動きを創りだす。(花田光世(2013)『「働く居場所」の作り方』日本経済新聞出版社)

2.研究テーマ

『キャリア教育における「行動意欲」と「キャリア観」の醸成』

本申請の該当テーマ:「ダイナミックプロセス型キャリア」のケーススタディによる、学生のキャリア観の醸成



3.本研究の趣旨と概要

成城大学における初年次科目「キャリア形成概論Ⅰ」(全学部共通1,2年次対象・2クラス・計238名:2014年度)は、キャリア(=人生)を考えるスタート科目として、学生が、自らキャリアを形成していく上での必要な考えかたを、理論と体験を組み合わせながら習得していく。自分ならではの強みや価値観を探り、キャリアビジョンを設定し行動計画を立て実行していく、といったプロセスにおいて、一歩踏み出す力(行動意欲)を醸成する。

上記科目の後続科目(Problem Based Learning)の「スタート・プログラム」(街づくり・旅行企画)、「アドバンス・プログラム」、「チャレンジ・プログラム」では、社会人と関わりながら仕事観を醸成する。そして、「キャリアモデル・ケーススタディ」では、①社会人ゲストを招きキャリアの転機をうかがい、②グループ課題として著名人の人生を分析し、③個人課題として身近なモデル(家族やバイト先店長等の社会人)にインタビューをし、人生の修羅場・正念場・土壇場を乗り越えた人生のストーリー「他人史」を冊子化し、授業終盤にモデルに贈呈する。このプロセスを通して「キャリア観」を醸成していく。

本申請の該当科目「キャリアモデル・ケーススタディ」において、開講前後と途中随時、アンケートやインタビューを行ない、その結果を定量・定性的に整理し考察する。

「キャリアモデル・ケーススタディ」科目概要:

後期開講2単位(選択科目) 全学部共通(経済・文芸・法・社会イノベーション) 2,3,4年生対象 2クラス(計30名)

定量的調査項目(予定)

・行動意欲(主体的創造的生活態度):「生きかた尺度」:根津裕己(1992),生き方の研究-尺度構成と自己態度との関わりについて カウンセリング研究、25,85-93。

・キャリア観(自律的取組姿勢と将来展望):「成人キャリア成熟尺度」:坂柳(1999)、成人キャリア成熟尺度(ACMS)の信頼性と妥当性の検討 愛知教育大学研究報告、48,115-122。

定性的調査項目(一部抜粋・予定)

・諸先輩のキャリア(人生の修羅場や正念場と乗り越えた原動力)をうかがい気づいたこと

・諸先輩の話のなかで響いたキーワードやエピソード

・「他人史」を完成させる中で苦労をした部分

4.期待される成果

授業実践における成果としては、学生時代から社会人と関わり、様々な生き様と正面から向き合うことで、社会に出るから誰もが直面するであろう「リアリティショック」を建設的に乗り越える力が身につく。

この「ダイナミックプロセス型キャリア理論」の概念は学生生活(部活動・卒業制作・就職活動等)においても非常に重要である。授業を通して、学部・専攻を超えたコミュニティ・オブ・プラクティスを形成していく。

(今後、機会があれば、SFC生を対象に、SFCの卒業生をモデルに、同様の「他人史」制作の機会に恵まれない。)

これらの実践と成果を学会等で公表し、さらに、授業自体を公開しながら、キャリア教育関係者の参考にしてもらうとともに、自らは今後の授業の在りかたを追究し、よりよい授業が展開できるよう授業改善に役立てていく。

また、研究の次のステップとしては、学生が卒業後、理不尽・予測不能な社会を前向きに捉え、どのように仕事と社会に貢献するか、この概念が発揮した影響についても考察したい。

この授業を通しての学生たちの気づきや学生たち自身の修羅場から、自分も学ぶことが多い。キャリアは属性(年齢等)関係なく、人それぞれにかけがえのないものということはこの研究を通して考えてまいりたい。

そして、「ダイナミックプロセス型キャリア」の概念を広く発信してまいりたい。

* ここまでは申請書より抜粋



5.正課科目「キャリアモデル・ケーススタディ」の授業の実践と検証

本科目の2014年度の履修生は、火曜日クラス7名、木曜日クラスは6名だった。成績と単位がつく正課科目ながらも卒業要件単位数に参入されない自由科目であり、それでもこのような”面倒であった”かもしれない科目を履修した学生は意識が大変高く、礼儀も正しく授業は全行程問題なく実施ができた。

招聘したゲストスピーカーは、様々な修羅場・正念場・土壇場を乗り越えたかたで、本科目のベースとなる「ダイナミックプロセス型」的キャリアを築いてこられたかたながら、どのセッションもその概念のもと議論が進んだ。(手段や価値観は人それぞれ)

一人一人ひとりの大切な人生に触れる科目ながら、臨む姿勢、向き合う態度、成果物制作にあたってのモラル・マナー・ルールは、講義、ロールプレイング、ケーススタディ、人間管家形成ワーク、など様々な方法で理解を深め体得に繋げた。

成果物「他人史(キャリアストーリー)」は今年度も完成し、作者・モデル・関係者に謹呈した。(個人のプライベートのことが記されているゆえ印刷冊数は最小限にとどめた)

6.アンケートの結果

この授業を通して何を感じ、何を得たか、過去3年間の履修生のコメントを質問項目に、キャリアモデル・ケーススタディの今年度の履修生(13名)も同様に感じているかを調査した。以下に、平均点の高い項目から各5項目を挙げ、比較のために、同様の対象(配当)で実施した職業選択論(29名)の平均点とその差も記す。(カッコが職業選択論のデータ)

キャリアモデル・ケーススタディ / 職業選択論*5点満点評価

1. 人を大切にしたいと思った 4.92 (4.59) + 0.33
2. 普段知り合えない仲間(履修生)と活動ができた 4.85 (4.1) + 0.75
3. 魅力的な人間になりたいと思った 4.85 (4.47) + 0.38
3. 技術・スキル・能力も大切だが、人間力(態度・姿勢・意識)も大事だと気付いた 4.77 (4.48) + 0.29
3. 生涯学習し、成長し続けることの大切さがわかった 4.77 (4.67) + 0.1
3. 現状に留まらず継続的に成長し続けていきたい 4.77 (4.30) + 0.47

キャリアモデル・ケーススタディ *5点満点評価

1. 幅広く人と繋がることの大切さ 4.92
2. たくさんの価値を感じられたのはこれからの人生に響いていく 4.91
3. 社会人や学部も異なる意欲的な仲間と意見交換をすることは貴重 4.91
4. 一人一人ひとりにキャリアがあり、ないがしろにしてはいけない 4.83
4. 何か夢中になれる人になりたい 4.83
4. 相手を知ると距離が縮まって相手のことをもっと好きになった 4.83
4. 他人史を通してキャリアの新しい継承のスタイルになればよい 4.83
4. 人はひとりでは生きていけない。たくさんの人と関わってたくさん吸収したい 4.83

質問項目の中での点数で最も値が低かった質問項目は、履修動機は「単位がほしいから」で、キャリアモデル・ケーススタディは1.46、職業選択論では2.18だった。→ 自発的に取り組む、内容自体に関心があることがうかがえる。また、職業選択論において、最も値が高かった質問項目は、「普段は聴けないゲストの話聴けた」であり、職業選択論では4.79、キャリアモデル・ケーススタディは4.31(-0.48)だった。キャリアモデル・ケーススタディでは「ゲストの話が目当てでなく、自分自身もケースとなりクラスメイトと全員で語りあうことも重要」とのコメントをもらった。

7.その他、前提・後続の正課科目における実践報告

正課科目「キャリア形成概論Ⅰ」「アドバンス・プログラム」(各前期開講)は、別の研究活動の一環で、「生き方尺度」「成人キャリア成熟尺度」を活用しアンケートを実施したり、この授業の意味・価値・改善点をうかがった。

正課科目「スタート・プログラムⅠ(街づくり)」は群馬県邑楽郡明和町の活性化に関わり、町長、町議会議員、役場職員、町民みなさんと活動を行なった。キャリア観の醸成について学生たちへのインタビューは別途開催予定(授業初回には既存尺度によるアンケートを実施)

正課科目「スタート・プログラムⅡ(企業提案)」は近畿日本ツーリストグループの社員のかたにご指導いただき、着地型観光商品を企画。豪徳寺を周辺を学生たちがガイドする商品を実際に販売し定員満員で実施。キャリア観の醸成について学生たちへのインタビューは別途開催予定(授業初回には既存尺度によるアンケートを実施)

正課科目「職業選択論」は、今年度はより実践的な(就職につながる)コンテンツを実施した。学生たちからは好評な授業ながら、「職業観」「勤労観」の醸成はあっても、「キャリア観」の醸成には至っていないよう、アンケートを実施したが、より授業に近い質問項目を練ってまいりたい。

正課科目「チャレンジ・プログラム」は、学内キャリアデザイン科目の集大成としての科目。今年度は7名だった。チームビルディングとリーダーシップ(学びの共同体づくり)に発揮をしながら、キャリア教育における「相互成長」を意識してもらった。結果、定量的な効果が得られるか、以前に行ったアンケートのデータも活用しながら変化を見る。

8.助成をいただいたなかで実施した活動

国際キャリア教育学会(2015年9月つくばにて開催予定): 発表(授業実践報告)申込済(アブストラクトの翻訳を依頼)

正課科目「キャリアモデル・ケーススタディ」「職業選択論」のゲストスピーカー招聘にあたり、授業開始前に、本科目「キャリアモデル・ケーススタディ」の趣旨についてのご意見と、授業評価についてヒアリングを行なった。

正課科目「スタート・プログラムⅡ(企業提案)」(本科目の前提科目)にてお世話になった企業のかたに、授業において指導いただくなかでの学生の様子についてインタビューを行なった。

中高生のキャリア意識と、授業実践活動について学習塾主宰者のかた、元中学校長先生に傾向をうかがった。

女性のキャリアルートについて、インタビューの視点を多角化するために、50代前後の女性3名のキャリアについてうかがい、学生によるこのようなインタビューについてご意見をうかがった(旅館女将として活躍をしながら大学院(博士課程)在学中のかた、雑誌記者からホテル・観光を専門にフリーで活躍されているかた、高校卒業後就職、若くして結婚後3子の出産を経て、若くして孫を持ちこれから活躍をしようとしているかた)にキャリアと生きがいと、授業実践についてのご意見をうかがった。

正課科目「キャリアモデル・ケーススタディ」における成果物「他人史(キャリアヒストリー)」の2014年版・2015年版をご覧いただくために下記の方々へ送付した。
(大学教員、招聘したゲストスピーカー、授業でお世話になったかた、学会発表時に関心をもってくださった教員のかた、授業参観者、等)

本研究のアドバイスを東京大学の小方直幸氏にご指導の機会をいただいた。

9.研究成果(申請時に記した予定・目標より)

1. 京都大学 高等教育研究開発推進センター MOST(大学教員のための教育研修の場:オンライン上に構築)にて、授業実践と本研究の成果を掲載(随時)

→合計11のスナップショットをギャラリーにし、MOSTのトップページで紹介いただいた。(↓下左)

<https://most-keep.jp>



2. 京都大学・東京大学・電通育英会主催「大学生研究フォーラム」にて途中経過を発表(2014年7月28日) (→右)
<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/forum/2014.html>

正課科目「キャリアモデル・ケーススタディ」と正課外プログラム「汽水域」について発表をさせていただきました。

3. 学会等での発表(エントリー)を検討中(2014年度 または2015年度)

国際キャリア教育学会 (2015年9月18日~21日)に申し込み
(スタート・プログラム I (街づくり)での実践とその履修生の本科目を後続科目として履修したキャリア観)
<http://www.iaevgconf2015.jp/>

4. 「キャリア形成支援の方法論と実践(仮称)」北大路書房 分担執筆(2014年12月発行予定)

2015年3月末発行にむけて入稿済み

10.そのほかの2014年度の活動成果

発表:「日本キャリア・カウンセリング研究会関西大会」:ピアザ淡海(2014年9月20日(土))/ 本科目の実践を発表
発表:「WACEプレ大会」:京都産業大学(2014年8月31日(金))/ 担当科目の実践(全体を通して)発表
発表:「大学教育研究フォーラム」:京都大学(2015年3月13日(金))/ 本科目をはじめ授業実践WEBサイトの紹介
活動:平成26年度「成長分野等における中核的専門人材養成等の戦略的推進」事業(訪日外国人受け入れに対応する日本型コンシェルジュ育成事業 / 授業を参考にキャリアプログラムやコンピテンシーディクショナリーを開発

改善:2015年度のシラバスを改善 次頁参照

11.「キャリアモデル・ケーススタディ」シラバスの改善

2015年度のシラバスは下記の旨、改善し実施予定(2015年3月1日(日)よりWEB上で公開

■**科目名** キャリアモデル・ケーススタディ

■**副題** 諸先輩のキャリアから学ぶ

■授業の内容

本科目は、他者のキャリアをケーススタディしながら自らのキャリア観を醸成していく科目です。諸先輩の修羅場・土壇場・正念場に焦点を当て、想定外の出来事をどのように乗り越え今に至っているか。経験や学びがどのように今に活かしているかといった「プロセス」について車座になり近い距離で議論します。

私たちは普段、新聞や雑誌上で、人の人生について記された文章を読んだり、あるいは、カフェで隣のテーブルの人生相談を耳にすることもあります。「そういう生き方もあるんだ」、「この人は随分苦労してきたんだ」と他者の人生を観て、少なからず影響も受けています。無意識的に「キャリアモデル・ケーススタディ」を行っています。

この授業ではケーススタディの場をフォーマルに用意し、様々なアプローチで人の生き様を追究します。趣旨のひとつは、日頃から「キャリアモデル・ケーススタディ」を行なうこと(客観視)を習慣づけていくことです。そしてもうひとつは、授業でとりあげるキャリアモデルの人生と一緒に「旅」(タイムマシンに同行)をし、もし自分だったらどう意思決定をするか、どう行動するかを(主観的に)考えます。

授業は、成功者の成功部分に焦点を当てるのではなく、また、エリートと言われる人たちの生き方を目指す授業でもありません。人がどんな人生観を持ち、修羅場を乗り越えてきたか、何が要因で価値観が変わり物事を受け容れたか。その過程で見える景色がどのように変わったか。それぞれが自身の経験と重ねながら生きかたの視野を拡げていきます。

授業は3つのラウンドで構成しています。①ゲストを招き車座になって生き様を語り合うセッション。②著名人の生き様をグループで分析しプレゼンテーションを行い、クラス全員での議論に発展させる。③個人課題「他人史」の作成。この3つのラウンドを通して、自分はキャリアをどのように歩んでいこうか・いくのだろうかを考えていく。誰にも人生にドラマがある。そしてそのすべてに意味がある。生活環境も価値観・仕事観も異なる、一人ひとりの生き様に正面から向き合う、そして、そこに共通するものは何かを考えていきます。

■到達目標

諸先輩方が予期せぬできごとをどのように乗り越え、偶然や出逢いをどのようにチャンスに変えて今に至ったか、キャリアルート(人生のプロセス)の様々な事例を聞き、調べ、自分のキャリアのヒントとし、在りかたを追究し意味づけができるようになる。

■授業の方法

ゲストセッション:お越しいただいたゲストに、これまでに直面した課題、乗り越えた際の原因力、転機となった出逢い、きっかけ、などをお話いただき、質疑応答を行なう。ゲストのスピーチは約25分間。幼少時代から今に至るまでの物語、節目や出逢い、修羅場や土壇場、大切にしていることなどを自由にお話いただく。スピーチの後は50分間の質疑応答を行なう。(質問例:「それは、どのようなことがきっかけ?」、「その場面をもう少し詳しくお話いただくことは可能でしょうか」、「それが今の○○さんのキャリアにどのようにつながっていますか」)

キャリアモデル分析(グループ課題):グループごと著名人を選び、そのかたのキャリアを分析する。新聞、書籍、ホームページをはじめとしたメディアのほか、生き様、節目、出逢い、困難を乗り越えた原因力、その人らしさ、を分析し、PowerPointを活用しながらプレゼンテーションを行なう。エリートと呼ばれる人たちの成功体験の中にも、これまで知らなかったどん底や試練がある。また、部分ごと分析をしていくと、その生き方なら自分自身もできるかもしれないといったチャンスも見つける。

「他人史」の作成(個人課題):ユニークなキャリアを構築した有名人の成功者物語は成功の後追い解釈ともいえる。なるほどと思いつつ自分にはそうはできないと、自分とは違う世界の話と引いてしまうこともある。そこで、身近な人をモデルに「他人史」を作成する。インタビューを通してその方のキャリアを引き出し一緒に意味づけます。他者のキャリアに、鳥の目(俯瞰)、虫の目(詳細)、魚の目(時間軸でながれを読みながら)で向き合い、冊子として完成させモデルに贈呈する。

■授業の計画

1. オリエンテーション: 事例シナリオを読み趣旨を共有する
2. 人間関係形成ワーク: 人の気持ちを理解する
3. ゲストセッション: 在学4年生の幼少期から今、そしてこれから
4. ゲストセッション: 若手社員のリアリティショック
5. ケーススタディ/他人史作成ガイダンス
6. 人間関係形成ワーク: 人の思いを尊重する
7. キャリアモデル分析/他人史依頼ロールプレイング
8. キャリアモデル分析/他人史取材ロールプレイング
9. ゲストセッション: 女性の出産と昇格
10. キャリアモデル分析: プレゼンテーション
11. ゲストセッション: 多様な働き方(独立・転職)
12. キャリアモデル分析: フィードバック/ケーススタディ
13. ケーススタディ: とりまく社会の現状
14. 他人史プレゼンテーション
15. 授業の総括・総まとめ

■授業以外の学習(予習・復習等) 各回に記入するワークシートや実習課題の完成、成果発表・冊子化の準備等。授業時間外もメンバーと積極的に交流し、ダイアログ(対話)の場を自らつくること。

■成績評価の基準と方法

1. 授業への参加度(56%), 2. 提出物等の実績(19%), 3. プレゼンテーションをはじめ貢献と活動成果(25%), の合計点で評価します。授業への参加度については、個人・ペア・グループワークにおける能動的態度と協調性、主体的な姿勢を尊重し、評価します。

■教科書

教科書は使用せず、参考資料をその都度配付します。

■参考文献

キャリアルート(自伝や取材)に関する書籍をはじめ授業の中で適宜紹介します。

■履修者への要望

各回のケースを通して、自分は何を感じたか、どう思うか、もし自分だったらどうするか、どう行動するか、全員が意見を言い、テーマを挙げ発展させていきましょう。このプロセスのなかで自身の考えが変化していくかもしれません。自由に思いのままに、心に消しゴムを持ちましょう。授業では、互いの強みを伸ばし合う、コミュニティ・オブ・プラクティス(相互成長の場)を提供します。主体的・能動的に取り組む姿勢、そして社会の一員として当事者意識を持って意欲的に参加することをこの科目の履修条件にします。社会人も頻繁に参加をします。グランドルールを守り、多様性を受容する“ダイバーシティ”なクラスをつくっていきましょう。

■教員との連絡・相談方法

オフィスアワー: 金曜日 12:30~13:30 勝又研究室

メールアドレス: katsumata[at]seijo.ac.jp ※[at]を@に置き換える。

12.まとめ

- 1.本科目は4年目となり、授業のかたちは整い、軌道にのったと思う。意欲の高い学生たちと進めていくには大変実践しやすいことはよい反面、関心のない学生たちにも取り組んでもらえるようなしくみは必要だと思う。
- 2.この授業を履修した学生のキャリア観がどのように変容したかを測ることは難しい。「観」と「行動」は、この科目だけでなく、そのほかの授業や生活上のイベント、人との出逢いの相互作用によって進化していく。また、今でなく将来、直面したイベントにこの授業での気づきが貢献できる可能性もある。履修生の卒業後も調査をさせてもらいたいと思う。
- 3.今後、機会があれば、SFC生を対象に、SFCの卒業生をモデルに、同様の「他人史」制作の機会に恵まれない。
- 4.これらの実践をキャリア教育関係者の参考にしていただくしくみを考えたい。
- 5.学びあう大切さ、多様な考え・視点を大切に、予期せぬできごとを自身のチャンスにつなげることといった「ダイナミックプロセス型キャリア」の概念を広く発信してまいりたい。
- 6.修士論文でとりあげる授業実践科目(2つのうちの1つ)として、引き続き、授業の内容(授業実践評価)と履修生の成長(意識の変容)を検証していきたい。

このたびは研究に助成をいただきましたことに感謝をいたします。

以上

2015年2月23日

政策・メディア研究科 修士2年
正村あづさ